

水上瀧太郎全集 十一卷

東京府規格外許司 巳紙規第一五一號

昭和十六年十一月十五日印刷
昭和十六年十一月二十日發行

水上瀧太郎全集 十一卷

會費參圓

著者 阿部章藏

發行者 岩波茂雄

東京市神田區一ツ橋三丁目三番地

印刷者 白井赫太郎

東京市神田區錦町三丁目十一番地

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行所 岩波書店

電話九段(33)一八七番
振替口座東京七四四一六番
會員番號一〇二〇三七番

配給元

東京市神田區
淡路町三丁目九番地

日本出版配給株式會社

精興社印刷 長澤製本

落丁・不齊完全品ながしまし直申出願すまひ お取致しす

目次

我家のドウガル	一
浮名儲	一七
澤木四方吉氏素描	二八
年末年始	四七
文壇游泳術	五六
就職難	六七
宇野四郎氏を憶ふ	七七
いひわけ	八九
その後のドウガル	九二

「吉野葛」を讀て感あり	一〇〇
「安城家の兄弟」を讀む	一〇八
元祿屋敷	一二〇
喰へない文學	一三四
父となる記	一四二
續父となる記	一五三
酒七題	一六九
フアンのいろいろ	一七七
ことばの亂脈	二四五
「福澤諭吉傳」の刊行に就て	二五二
はせ川雜記	二五四
「西洋美術史研究」の序	二六三

「ロンドン・ルヂア發端地」の作者 二六五

同人雜誌の辯 二七一

一文學生に答ふ 二七七

もう一度「三田文學」について 二八二

三宅悠紀子さんの戯曲 二八九

夜汽車、宿屋、その他の落書 二九五

初老會前説 三〇五

「師・友・書籍」の序 三一三

春窓院梅譽妙音大姉 三一六

年輪の差 三二三

親馬鹿の記 三三一

「二筋道」散策 三四六

續親馬鹿の記	三六一
根氣くらべ	三七二
「三田文學」編輯委員隱居の辭	三八二
なかぞまや屋の酒	三九〇
弔辭	三九一
鎌田榮吉先生を憶ふ	三九三
「雪女郎」立見の記	四〇四
借家運	四一六
「註文帳畫譜」ちらし	四二九
輝く編輯者	四三二
から最負	四四三
相撲雜記	四四九

修文院釋樂邦信士	四六五
藝術家の反吐	四七〇
鈴木三重吉氏の酒の上	四七五
街歌	四八一
ちゃんぼん生活	四八六
老父歎	四九二
「郡虎彦全集」に就て	五〇〇
極樂浄土	五〇五
土産の石	五一一
空襲	五一七
涙いろいろ	五二一
流行唄	五二七

留守番	五三三
取越苦勞	五三八
旅籠苦勞	五四三
草を踏む	五四九
朝鮮晴	五五三
老人激昂	五五七
賣女の友	五六三
指定席の批評家	五六七
わせたのわるもの	五七五
清順院貞室惠京大姉一周忌	五八〇
七生報國	五八五
大道狹し	五九〇

空氣の味	五九五
相撲客道	五九九
「人生案内」まへがき	六〇四
前相撲見物記	六〇六
曾禰先生追憶	六一七
嫁入支度	六二二
素人談義	六三三
ものゝふのみち	六三七
覺書	六四五
後記	一

我家のドウガル

我が家のドウガル

バネット夫人の「小公子」は、本を読む事の好きな少年少女の、誰しも一度は夢中になつて讀み、大人になつてもなつかしく想ひ出す際の物語である。その物語の中に一頭の名犬があらはれる。どうしたものか、私はその犬をセント・バアアド種だと思ひ込んで居た。そのむかし若松賤子の翻譯で讀んだ時以來「小公子」は深い感銘をのこし、當時女學校へ通ふ姉が、繪入の原書をならつてゐて、氣どつた發音で小公子の名を呼ぶのを、ひそかに羨しく思つたものである。その本の口繪にも、巨大なる犬に寄添ふ可憐なる小公子の姿が描いてあつたが、年を経て私の記憶には、ふさふさした金髪がゆるやかな波をうつ襟もとや手首に白いレエスの飾のついた服を着た小公子と、その小公子を守護するものゝ如く想はれる巨大なる犬が、この小説一篇の繪看板として大映おぼろにあらはれるのであつた。

セント・パアナド種の犬について、手許にある教科書には下の通り記述してある。

本種は瑞西國セント・パアナド山(アルプス山脈中)の原産なり、元來此地は海拔七千八百八十尺に達し冬期長く且つ甚だ寒冷にして積雪三十尺乃至四十尺に及び年々巡拜者の餓死凍死するもの少なからず、茲に於て第八世紀以來旅人の救助は僧侶の勤となり一方堅固なる石室を設けて宿泊を便にし他方に於ては則ち本犬により遭難者の探索を行ふに至れり。通常搜索には二頭の犬を用ゐる一は溫暖なる毛布を背に纏ひ一は飲料食物藥品等を入れたる籠を頸に提げ山中を跋涉し遭難者を發見する時は之を寺院に運び力及ばざる時は歸りて僧侶に告ぐ斯の如くにして人命を救ふこと多きが中にバレイと稱する犬は一生中四十餘人を救助せりといふ、我國にてもかの八甲田山の遭難に使用せりといふ、本種は現今各國に散在し其主なる用途は伴侶及警戒にして被毛により短毛種及長毛種に區別す、性よく寒國に適し勇敢にして然も嗅力強く搜索に巧なり、

一般形態　犬族中體格最も強大にして體尺一尺七寸乃至三尺、體重百三十乃至百七十磅に達す、

頭は重大、頭蓋高く、頂大にして圓隆す、眼は適度に大きく慈愛の相を呈し下眼瞼弛垂し赤

色の臙膜露出す、耳は下垂し大さ中等とす、口鼻部よく發育して廣く其の末端方形を呈し唇稍下垂す、

頸は長く強く厚く、胸は強大にして胸廣く腰強く、臀部の發育佳良なり、

四肢は筋骨強大にして足亦大なるを要す、

毛色赤白、橙黄色、白等の斑にして、額、口鼻部、頸、前肢等白色なるを普通とす、

八甲田山の雪に埋もれた兵士を捜索に行つたといふのは、何處から連れて行つたのかしらないが、果して純粹種であるかどうか疑はしく思はれる程日本には數が少ない。従つて何がセント・パアナド種であるか知らない人が多く、屢々作品の中に犬を描き、又いかにも犬通らしくおもはれる室生犀星氏さへ、曾てセント・パアナド種の狼犬などゝ書いてゐた程で、それではラテン人種の日本人と云ふやうなとんちんかんである。

私が日本で見たセント・パアナドの逸物は、ひとむかし前青山邊で、一人の書生さんが二頭引張つて歩いてゐた奴だ。牡の方が殊に大きく、素晴らしい身長を有してゐた。今は故人となつた中村は公氏の飼犬だと云ふ噂だつた。あゝいふやつを引きつれて歩いたらさぞ愉快だらうと思ふにつけ「小公子」を聯想したものである。

ところが昨年、伊勢は津でもつ津は伊勢でもつの舊家川喜田家の御主人から、自分のところのセント・バーナードが十一疋仔を生んで、一疋はあやまつて親犬が踏殺してしまつたけれど、十疋は完全に成育してゐる、恐らく日本で此の種類の犬の安産ははじめての事だらうと云ふお話を承つた。

その御話を犬きちがひの弟に傳へた。この男は年中數頭の犬を飼育し、先頃お嫁さんを迎へたが、花嫁はその日から、氣むづかしい亭主と、それにも増して手のかゝる犬どもの世話に日も足らぬ新居を營まなければならぬ身の上となつた。はたで見えてゐて、お嫁さんが氣の毒に思はれるのだが、別段苦にもしないで、寝蓐をとりかへ、食餌を與へ、お産のとりあげも上手にやつてゐるのを見ると、正に良妻にして將來賢母たる可き素質を備へてゐるに違ひ無い。その弟のいふには、日本生まれのセント・バーナードだつてゐない事は無い、よく品評會にも出てゐる、しかしいゝやつは見當らないとの事だつた。恐らく川喜田家のは優良種に相違なく、しかも十疋も成育してゐるのはまことに御目出度い事だから、せめて寫眞でも頂いてはくれまいかと云ふ。

その後川喜田さんに御目にかゝる度に、仔犬の成育の状態を聞かされ、私は又弟に受賣りし、弟は羨望に堪へぬものゝ如く、しきりに實物を見度がつてゐた。送つて頂いた寫眞によれば、正

に逸物に違ひ無いと弟は信じてゐた。

川喜田さんは、珍しく十疋も育つてゐるのだから、残らず手許で飼つて見る積りだと云つて居られた。傳へきく津市郊外千歳山の川喜田邸は、山あり池あり林あり田圃もあると云ふ廣大なものださうで、その廣い屋敷内を巨大なる十二頭の犬が悠々と漫歩する風景は甚だ雄大なものに想はれる。

然るに今年の春四月、川喜田家には再び御目出度があり、九疋の仔犬が生まれた。いかに邸内が廣くても二十一頭のセント・パアナドを飼育するのは手がかゝり過ぎる。しかも他の種類の犬も數頭ゐるといふのだから、犬口過剩といはねばならぬ。流石の川喜田さんも相手をえらんで譲り度いと云ふ御話だったので、直ぐさま弟に知らせてやつた。是非一頭譲つて頂き度いと云ふので、川喜田家犬係の方へ書面で申入れると、折返して御主人から、今年うまれの九頭のうちから一頭をよりどりさせるから、本人に來て貰ひ度いと云ふ御返事だつた。弟は雀躍して、早速出向くと云ふ。私は、弟を御存じない川喜田家の方々の爲にあらはじめ其面構を御知らせして置いた。身長五尺七寸餘、顔色あく迄も黒く、眼光鋭く、極めて無愛想なり云々

そんな人相書が廻つてゐるとも知らずに、弟は良妻と共に東京を立つた。翌朝川喜田邸に到着、

取次の方にむかつて直に犬舎へ案内を乞ひ、どれでもよりどれと云はれて選定に迷ひ、思召のあ
る二頭を見比べて終日を盡したさうだ。

犬を頂戴して歸つて来たから見に來いといふ案内をうけ、愚妻はお土産に頸輪を買ひ求めて持
參した。弟の新居は、家は立派では無いが犬舎は頗る壯大なもので、殆んど一木一草も無い犬の
散歩向の庭に、それが座敷へ尻をむけて立つてゐるのである。

其處には獨逸シェパードの親子がゐる。獵につれて行く英吉利ポインタアの親子がゐる。而し
て、川喜田家から頂戴して來た生後三箇月のセント・パアナードがゐるのである。それは同じ頃
に生れた他の犬の何倍とも云ひ難い程肥大なものである。何故比べる事が出来ないかといふと、
まるつきり形態が違ふからで、若しも同じ頃に生れた熊の子がゐるなら、それと對比してどつち
が大きいかと云ふ方が適切であらう。先づ頸といふものがあるといへばあり、無いといへば無い
と云つても差支ない程太く、愚妻が持參した頸輪の如きは腕輪にする外しつかた爲方が無い位であつた。
それ程四肢も太く、どこにも細い部分の無い、づんどの如き姿である。往年亞米利加の大統領ル
ウズベルトに擬したテディ・ベアと呼ぶ玩具がはやり、日本にも渡來したが、仔犬は恰もその熊
のおもちやの形だつた。

名前は「小公子」の中に出て来るセント・パアナドを襲名させると、はたで騒いだが、弟はマダム・テレルと名づけた。テレル夫人とはつい先頃日本へも来た大女の藝人である。いしくもつけたりと一同感心した。

テレルは一木一草も無い庭をよたよたかけ歩き、お相手役のシェパードの仔犬の敏捷なのにかかはれ、追かけ、屢々自分自身のからだの重みに堪へ兼ねてつんのめつた。

その頃拙宅には弟の世話でシェパードの仔が二疋来てゐた。牝の方は骨格に缺點があつて、誰の眼にも感心しかねる姿だつたが、牡の方はなかなかの尤物で、大好きのおかつちやんは、朝晩散歩につれて出て、通りすがりの人や、犬猫病院の院長さんにほめられ、大得意で歸つて来た。ねえ、をばさん、この犬は随分いゝ男なんだとさと、耳の遠い相手に大きな聲で報告してゐるのであつたが、その尤物も、ひとたびテレル夫人にまみえてからは、俄に安つぽく、げすつぽく見えて困つた。

九月になつて、久々で川喜田さんに御目にかゝつた時、若し望みなら君にも一頭やるがどうだと云ふお話だつた。私もかねての望みだから、一度はセント・パアナドを引張つて歩き度いだだが、何分借家住居の事ではあり、家の向が西北むきで日あたりは悪いし、外に男手は無いら